コズロフを送る（四）

大杉栄

と思つてゐるところへ、村木が「オイ、妻危篤、直ぐ歸れ」と電報を持つて來た。奴はやはり妻からだと云ふ。「クララに會ひたいから行つてもいゝか」と云ふのだつた。

「行つてもいゝか」と云ふのだつたが、それを知らない事は、此の交渉でゝも分るやうに僕は行けない事と一人きめてゐるので。目の悪い上に今は一日も嘆せない忙しい用事を持つてゐる事を知つてゐるのだ。で、せめては、僕のかはりに、自分が行かうと思つてゐるのだ。

それに、彼の女は又、實際クララとはいゝ友達だつた。彼の女が僕との最初の子、即ち麻子を生んだばかりのところへ、クララがスガチカを敢めて大きなお腹をして、始めて僕等を訪ねて來て以來、お互の往來はほとんど毎日の如くになつてゐる僕の財布の事だつた。

「行つてもいゝか」と聞くなんて、困つたのはたゞ、僕一人でもう歸りの汽車賃がなくなつてゐる僕の財布の事だつた。

「クララに會ひたいから行つてもいゝか」と云ふのだつた。

「奴が困つた奴でも何んで困つたのはたゞ、僕一人でもう歸りの汽車賃がなくなつてゐる僕の財布の事だつた。

それに、彼の女は又、實際クララとはいゝ友達だつた。彼の女が僕との最初の子、即ち麻子を生んだばかりのところへ、クララがスガチカを敢めて大きなお腹をして、始めて僕等を訪ねて來て以來、お互の往來はほとんど毎日の如くにな